

美術工芸研究室 工芸

興福院のふくさ及び東大寺図書館の厨子

研究所発足以来、工芸室は研究所の主旨に添い工芸室のテーマをもつて調査研究を続けている。調査地区は地理的関係から近畿地区を第一段階としているが、依頼調査は許される範囲において依頼者の要望にこたえて出張調査を行つた。

工芸室の調査物件の主なるもの記せば、以上の如くである。

昭和28年7月	千体寺の厨子	大和郡市丹後庄	"	"	東大寺図書館厨子	奈良市雜司町
"	8月	天川社の能衣裳、能面	奈良県吉野郡天川村	"	江戸小袖	京都市中京区小川通裏川上ル
"	12月	能衣裳、能面	伊勢市天川社	"	田畠起壱郎	奈良市法蓮町
昭和29年6月	春日神社能衣裳	岐阜県関市	"	11月	千体菜師厨子	奈良市法蓮町
"	8月	唐招提寺総合調査	奈良市五条町	"		興福院
昭和30年7月	西大寺総合調査	奈良市西大寺町	"			
昭和31年7月	興福院ふくさ	奈良市法蓮町	"			
"	12月	東雲神社能衣裳、能面	愛媛県松山市			
昭和32年7月	唐招提寺舍利塔とレース	奈良市五条町				
"	9月	東大寺舍利塔	奈良市雜司町			
昭和32年10月	知足院厨子	奈良市雜司町				
		東大寺知足院				

今回紹介を試みる作品は興福院のふくさと東大寺図書館に保存されている厨子である。

これらの作品は、その製作の優秀さはもちろんあるが、それに加えて、これらの作品の類例が殆んど他に見られないことで、まことに貴重な資料といえよう。かかる意味において、この二点の紹介を撰んだ。

一 興福院ふくさ

興福院の什物として伝えられている参拾枚のふくさは、ふくさの資料としてまことに貴重な作品といえよう。この興福院ふくさは、いわゆるかけふくさで進物などの上に覆いかけるものである。

ふくさは紬紗、服紗、袱子などいろいろの文字が当てられていて、その語源やその発展過程についてはいまだ定説がない。しかし、染織工芸品は、その発生は殆んど実用に立脚し、やがて装飾へ移行する一般性から考えて、はじめは塵をよけるため覆紗したことからやがて美

的景觀を添えるかけふくさの出現にまで發展したとも考えられよう。

興福院ふくさは、江戸初期の後期に属する作品で、すでに裝飾的な要素を多分にもつたふくさになつてゐる。先づ作品を紹介すると、

白縞子地枝垂桜丁字袋献花文様刺繡紺紗	1.67尺×1.71尺 タテ ヨコ
赤縞子地猩々文様刺繡紺紗	1.67尺×1.71尺
紅縞子地羽子板樂寿文字入文様刺繡紺紗	1.67尺×1.71尺
縲縷子地跳子盆草花長生文字入文様刺繡紺紗	1.6 尺×1.7 尺
鬱金縞子地梅花末広宝袋樂寿文字入文様刺繡紺紗	1.67尺×1.73尺
薄縲縷子地丁字袋熨斗南天若松万歳文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.67尺
白縞子地柳葦分舟文様刺繡紺紗	1.65尺×1.7 尺
黄茶縞子地中啓花籠万歳文字入文様刺繡紺紗	1.7 尺×1.7 尺
白縞子地枝垂桜宝衰熨斗文様刺繡紺紗	1.69尺×1.71尺
縲縷子地牡丹反物宝尽し宝寿文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.7 尺
白縞子地跳子熨斗菊花福貴文字入文様刺繡紺紗	1.68尺×1.7 尺
薄紅縞子地熨斗秋草文様刺繡紺紗	1.66尺×1.7 尺
紅縞子地範菊花千秋樂文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.7 尺
紅縞子地門松儀万歳樂文字入文様刺繡紺紗	1.68尺×1.7 尺
薄縲縷子地橘南天熨斗繁昌文字入文様刺繡紺紗	1.69尺×1.69尺
紅縞子地島台寿文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.7 尺
紅縞子地花活福貴文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.7 尺
紅縞子地梅宝尽し万寿文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.71尺
黄茶縞子地梅花宝尽し福寿文字入文様刺繡紺紗	1.66尺×1.7 尺
白縞子地瓶子跳子つゝじ樂寿文字入文様刺繡紺紗	1.68尺×1.7 尺

白綸子地献花活花団扇文様刺繡紺紗	1.68尺×1.69尺
白綸子地中啓松竹宝尽し文様刺繡紺紗	1.67尺×1.7尺
薄縹緞子地若松宝尽し寿文字入文様刺繡紺紗	1.69尺×1.7尺
赤緞子地宝船中啓千歳文字入文様刺繡紺紗	1.7尺×1.7尺
鬱金緞子地枝垂桜茶釜献花文様刺繡紺紗	1.65尺×1.7尺
白緞子地松竹宝船文様刺繡紺紗	1.67尺×1.7尺
赤緞子地ばら花反物宝尽し宝寿文字入文様刺繡紺紗	1.7尺×1.7尺
赤緞子地ばら花反物宝尽し宝寿文字入文様刺繡紺紗	1.7尺×1.7尺
赤緞子地橘反物熨斗万歳樂文字入文様刺繡紺紗	1.7尺×1.7尺
赤緞子地大根宝尽し果物万歳樂文字入文様刺繡紺紗	1.67尺×1.69尺
鬱金緞子地熨斗宝尽し小袖福寿文字入文様刺繡紺紗	1.7尺×1.7尺

五代將軍綱吉は延宝八年八月に將軍職につき宝永六年正月に歿するまで約三十年間將軍として君臨したが、その間の天和、貞享、元禄、宝永時代は染織史上まことに華かな時代であつた。したがつて、興福院ふくさは宝永六年までに製作された作品であることが知られる。ふくさの生地は江戸初期頃から漸く一般の衣服用に使用されるようになつた綸子、緞子、緞子の三種類に限られ、その地色も赤系統が最も多く白がそれにつぎ、青系統と鬱金色、黄茶色となつてゐるが、これも時代の好みが反映したものであろう。参拾毫枚とも寸法は、ほぼ同じであり裏は一枚の例外もなく紅絹がつけられてある。

文様は四季の花を主材としたものが多く、それに吉祥文様や縁起のいい言葉を文字に出したものもあり、これらを多彩な色糸や金糸で、精巧緻密に些かの破綻もみせず鮮かに刺繡してゐるには誰れしも驚嘆の他はない。わが国における刺繡の発達は早く、すでに飛鳥時代からその作品を残しておりますが時代によりそれぞれの技術発展は見られる。然し殊に、室町末期から桃山期にわたつて小袖の表着えの進出と能衣裳の発生発展に伴つて、それらに刺繡を施す必要性は繡技の発達をうながさざるを得なくなり刺繡技術の非常な発達がみられるにいたつた。更に、江戸期に入つては、繡技の変化と技術の洗練化へ進む傾向を示してくる。興福院ふくさにはそのような情勢もみられ、どの作品も仕上りはまことにつつきりとして洗練されてゐる。

製作者にはよほどの腕達者が撰ばれたと思はれるが、かま糸による織細な種々の繡技も見事な技術的バランスを保つてゐる。このすぐれもつに至り、寺内の最高の場所に歴代將軍の廟所まで建立している興福院に、これらのものが伝えられていても別に不思議はないが、地区が南都だけに些か興味を引く。

た繡技と共に、糸色の配色も巧妙を極め六色或は七色の色糸を自由に駆使しているが、殊に金糸の扱い方がいい。色糸のやや繁雑に流れんとする時は強く金糸でしめくくり、或は又、金糸で視覚的重圧を加え布面の色調を調和させて格調の高い、しかも豪華な作品を完成している。やもすれば低調に陥り易い刺繡作品に、かかる高い品格と芸術性が観得されるのは、すぐれた繡技と洗練された色彩感覚によるが將軍御用と云う絶対的なものに対して製作者のきびしい態度も看過できないものだらう。保存よく伝はる興福院ふくさは、江戸ふくさの代表的優秀作品であり、類例の極めてすくない貴重な資料である。

二 東大寺図書館の厨子

厨子といえど誰でもが神像や仏像や舍利塔をはじめとして信仰の対象物が納めてあるいれものを想像するだらう。現存している厨子の殆んどが信仰の対象物を安置していることからして、そのように考えられるのも無理からぬことである。

もともと、厨子の用途はいろいろとあり信仰の対象物を安置するの
はその一つにすぎない。しかし、他の用途をもつた厨子の現存品が非
常にすくなく、ただ正倉院に伝はる三基の厨子が代表的なものである
その一つは正倉院宝物中でも最も由緒の深いものの一つである赤漆文
櫛木厨子で、この厨子は天武、持統、文武、元正、聖武、孝謙の歴代
にわたつて伝えられたことの知られるもので、これは天皇が常に御居
間に置かれ、その中に雑集、杜家立成、樂毅論などの巻物のほか、十
合刀子、牙笏、紅牙撥鏤尺、白牙尺、刻影尺八、雙六頭および子など

が納められてあつた。他の二つは、黒柿両面厨子と柿両面厨子と呼ばれるもので共に厨子の表と裏に両面開きの扉があり、中に一段の棚をつくり、台には狹間形透かしの床脚がついている。この二つの厨子は赤漆文櫻木厨子の如く用途が判然としていないが、厨子の構造から推測して同様な用途にあてられたものであらう。

正倉院に伝えられるこれらの厨子と同様な用途をもつ厨子の作例は見出しづらいが、いま、東大寺の図書館に伝えられている厨子は、構造は異つているが用途は正倉院厨子と同系統のもので、類例のまことにすくない厨子である。

東大寺図書館の厨子は木質黒漆塗り、両折両開きの扉をもつもので、高さ五尺二寸五分、間口四尺五寸、奥行一尺一寸八分。中には四段の棚を設け、大般若波羅密多経六百巻が納められる。扉の内側には大般若経の守護神たる十六善神の像が描かれてあり、大般若経を納める厨子で、書架の用途をもつた厨子といえよう。

厨子の構成は台座、軸部、屋根の三部分からなる。台座は脊狹間形透かしが前後各三、左右各一箇あり、高さ七寸二分五厘、間口四尺六寸八分、奥行は一尺三寸六分五厘で底板も上板も張らず幅二寸二分の木組である。四隅の上下には無文の鍍金金具が都合八箇つけられていて、現在は前面の左右の上下に残るのみ。台座の上部、即ち軸部をのせる場所の四隅には五分位の山形の突起をつくり軸部の安定をはかっている。

軸部は下から五寸四分の高さに前面は三箇、左右各一箇の香狹間を設け、それらを胡粉地にしてその上に緑青で唐獅子を一匹ずつ達者に

描く。正面中央の唐獅子は正面を向き、左右の唐獅子は相対する姿に描き、左右の側面は対照的な姿勢に描かれている。扉は両折両開きのもので、柱に左右ともに三箇の鍍金金具の蝶番でつけられ、扉の折目にも三箇の同様の金具蝶番でつけられており、扉の表面中央に押えの錠がありその少し上部にえび錠がつけられてある。扉の内面には十六善神の画像を可成り細密な筆で描く。内部は厚さ七分、幅一尺一寸の棚を四段設け黒漆塗り。無文の鍍金金具が

香狹間のある

部分の凹隅の

上下と正面の

香狹間の上下

に各二箇づつ

打たれている。

屋根は巾九

寸九分、長さ

四尺三寸の上

蓋をもつ巾一

尺七寸、長さ

五尺、高さ二

寸三分五厘の

屋根で、ゆる

やかな傾斜を

もつてゐる。

第二図 東大寺図書館厨子

書写畢為寺門繁昌仏法紹
隆勸六百人持齋戒令書写之

この厨子
こ納められ
てある大般
若波羅密多
経六百巻は、
高さ一寸五
分、縦一尺
一分五厘、
横一尺三寸
五分五厘の
黒漆塗りの
箱に、一箱
に十巻づつ
納め一段に
四かさね三列に置く。したがつて、一段に百二十巻、五段で六百巻に
なるわけで、このような整理方法で納められている。

願主前大僧正法印大和尚位 良信

第三図 東大寺図書館厨子内部
高さ一寸五
分、縦一尺
一分五厘、
横一尺三寸
五分五厘の
黒漆塗りの
箱に、一箱
に十巻づつ
納め一段に
四かさね三列に置く。したがつて、一段に百二十巻、五段で六百巻に
なるわけで、このような整理方法で納められている。

さて、この厨子の製作年代であるが、これは中に納められてある大般若経六百巻の書写が完成した文保二年（一二二八）にこれを納めるためには製作されたものであろう。現在、大般若経六百巻は、縦八寸四分、横一寸五分の折本仕立てになつており、一紙の長さ一尺七寸五分、二十九行、十七字詰で何れもが書写されたものである。卷五百七十八をひろげて見るとその巻末に、

明応七年戊八月日以勧進買得之
東大寺戒壇院所寄附也沙門長悟
六十四才

鎌倉期の厨子の遺作は可成り現存するが、何れもが信仰の対象物を納める厨子であり、かかる用途をもつ鎌倉期の厨子の遺品はその類例が見られないと思つてもいいだろう。台座や香狭間、屋根に可成りの漆はげや損傷は見られるが、補修などは少しもなく概して保存も良好で、鎌倉末期の作風をよく示している貴重な資料である。（守田公大）